

研究振興の文脈における 大学図書館の機能

2016年3月9日(水)

13:00 - 17:10

ベルサール神保町アネックス
ホールA

講演者

尾城 孝一

(東京大学附属図書館 事務部長)

引原 隆士

(京都大学図書館機構長)

真子 博

(内閣府)

有川 節夫

(前九州大学総長)

パネルモデレーター

市古 みどり

(慶應義塾大学日吉メディアセンター 事務長)

司会進行

星子 奈美

(九州大学附属図書館)

日本における大学図書館を中心としたオープンアクセス運動は、2005年の「次世代学術コンテンツ基盤共同構築事業」の開始当初における意味付け以降、実は本質的に変化することなく今日にまで至っている。当初のオープンアクセス運動は、研究機関においてとくに研究者にその意義をはっきり提示できなかったことに起因して、機関リポジトリそのものの運用すら受け入れられない状況があった。この10年の間に、図書館員および関連する研究者がオープンアクセスとは何か、機関リポジトリとは何かという問いに答えていく自発的活動を通して、徐々に機関リポジトリの存在が機関の構成員に受け入れられるようになってきている。

オープンアクセス運動の展開は、欧米では、そのオープンアクセスの理念と密接に関連して、研究データの共有を主眼に置いたオープンサイエンスという新たな研究環境の構築を目指す活動へと進化していった。一方の日本では、国際的な動向を踏まえた形で2015年に内閣府の報告書が公表されたが、オープンサイエンスという概念についての議論に、内的な動機付けが追いついていないのが実情である。今日の日本の研究機関において、とくに図書館を取り巻く研究支援の新たな方向性は、機関リポジトリの推進において標語としたオープンアクセスの理念と、研究データ共有を方策の中心に添えたオープンサイエンスとが同時並行的に進められるという複雑な様相を呈することとなった。

更に、先進国で日本だけが研究力を低下させていることを示唆する計量文献学的定量指標が存在していることがよく取り沙汰される中、これまで培ってきた日本の研究力を活性化させより強固なものとしていくことがいっそう求められている。我々大学図書館は、オープンアクセスやオープンサイエンスを単なる外来の概念として咀嚼、整理することではなく、本セミナーでの話題提供を通して、日本における研究振興という文脈のなかで、次代の日本の研究支援の方策を具体的に構想しながら考えてみたい。

お問い合わせ

〒101-8430 東京都千代田区一ツ橋 2-1-2
国立情報学研究所
学術基盤推進部学術コンテンツ課支援チーム SPARC担当
E-mail: co_sparc_all@nii.ac.jp FAX: 03-4212-2375

参加無料

申込期限:平成28年3月7日(月)
下記URLからお申込みください。

<http://www.nii.ac.jp/sparc/event/>

主催: SPARC Japan (国立情報学研究所)

 SPARC® Japan

 NII

大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構
国立情報学研究所
National Institute of Informatics

